

# 京都府美山町の地域づくりに関する研究 ～住民による特産物づくりや地域振興会などに注目して～

卒業研究梗概 2002.2.13  
水野研究室 直江広太郎

## 1. 研究の背景

今日、わが国の中山間地域の多くは、過疎化の進行などにより地域衰退の危機に直面しており、地域の活性化をめざす地域づくりが全国各地で盛んに行われている(\*)。

京都府美山町は、住民と行政が一丸となって、上記のような地域づくりに取り組んでいる地域のひとつである。

## 2. 研究の目的

本研究の全体的目的は、京都府美山町を研究の対象地域として設定し、住民の手による地域づくり・地域振興会・特産物(\*\*)づくりなどに注目して、どのような地域づくりが行われているのかを検討することである。そのための個別的課題は次のとおりである。

- (1)地域振興会について--美山町では、地域振興会が地域づくりの柱の一つに位置づけられているが、その人的構成、活動内容、活動の場所、地域づくりにおいて果たしている役割、地域づくりに及ぼしている効果は、どのようなものか。
- (2)住民による特産物づくりについて--美山町では、住民による特産物づくりが行われているが、その生産活動・販売活動の内容等(参加者、生産物・販売物、生産・販売の方法、活動場所など)、は、どのようなものか。
- (3)住民出資の商店について--美山町には、住民出資の商店もあるが、その活動内容等(参加者、販売物、販売方法、活動場所など)、は、どのようなものか。
- (4)相乗作用について--上記の(1)～(3)は、互いにどのように影響を及ぼし合っているのか。また、それらは、住民の手による地域づくりに、どのような影響を及ぼしているのか。
- (5)行政と住民の連携について--上記の(1)～(3)において、行政と住民の連携は、どのようになっているのか。

## 3. 既往研究 (脚注\*3 参照)

## 4. 研究対象地の概要(一部、調査結果を含む)

京都府美山町では、2001年度に自治会・村おこし推進委員会・地区公民館組織、美山町地域振興課が合併して5つの旧村(大野・宮島・鶴ヶ岡・知井・平屋)ごとに地域振興会がつくられ(\*\*)、それぞれに事務局員として行政職員が配属されている。この地域振興会は、次のような点で、山間過疎地域における新たな地域づくりの手法の一つとして注目されているようである(\*\*)。

- ①自治会等の地域組織を一体化することで、各々の組織の取り組みを総合的にこなせるようになった点。
- ②地域振興会の活動と住民による特産物づくりの活動・住民出資の商店の活動の連携を通じて、住民の手によ

る地域づくりの促進を図ろうとしている点。

## 5. 研究の方法

5-1 文献調査 本研究に関する文献を整理した(\*)。

## 5-2 地域振興会の関係者に対するヒアリング調査

- (1)調査内容--①地域振興会の概要、②住民による地域づくりの活動(特産物づくりを含む)との関係、③その他
- (2)調査対象者--地域振興会の関係者(6名実施)
- (3)調査時期--2002.5-2003.1

## 5-3 特産物づくりの関係者・住民出資の商店の関係者に対するヒアリング調査

- (1)調査内容--①特産物づくりについて(特産物づくりの概要、地域振興会との関係など)、②住民出資の商店について(商店の概要、地域振興会との関係など)、③その他
- (2)調査対象者--特産物づくりを行っている地域住民(5名実施)、住民出資の商店関係者(7名実施)
- (3)調査時期--2002.5-2003.1

## 5-4 特産物づくりに関わる住民に対するアンケート調査

- (1)調査内容--①特産物づくりの概要、②地域振興会と特産物づくり活動の関係など、③その他
- (2)調査対象者--大野地区に住んでいる特産物づくりを行っている住民(55名に配布)(回収率69.1%)
- (3)調査時期--2002.11月下旬に配布、12月中旬に回収

## 6. 調査結果

### 6-1 地域振興会の関係者に対するヒアリング調査結果

大野・宮島・鶴ヶ岡・知井・平屋の5つの地域振興会の関係者に対して、ヒアリング調査を行った。そのなかで、特産物づくりへの支援を盛んにおこなっている大野振興会についてのヒアリング結果を表1に記す。

表1：大野振興会についてのヒアリング結果

項目	内容
所在地・建物	大野地区大野集落にある。事務所は、以前農協の支所だった建物で、町が買い取った建物である。住民出資の商店大野屋と同じ建物で壁一枚はさんで隣りである。
役員数・年齢	役員は14名で、この他に役場から派遣された事務職員が2名いる。役員の年齢は38歳から70歳である。
大野振興会の活動の概要	<p>&lt;地域振興会での行政の役割・地域に及ぼしている効果&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域振興会の事務局の活動内容は、行政の窓口サービス・年間の事業計画に基づくイベントの開催・各種の事務活動・住民のニーズの把握などである。</li> <li>・美山町は、高齢者が多く、役場までのバスの移動が大変だったので、行政事務が地域振興会でできるようになったことで住民の利便が向上された。また、地域振興会は、その地区に住んでいる地域の職員を派遣しているので地元住民も気軽に接することができる。</li> </ul> <p>&lt;特産物づくりの支援の具体例&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大野振興会からのチラシの中に無人販売所の紹介の記事をいれた。</li> </ul> <p>&lt;大野屋との関係について&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、大野屋と大野振興会の建物の建て直し工事が進んでいる。新しい建物では、地域の住民が集まって話ができる集会場や無人販売所などが出来る予定である。</li> </ul>

大野振興会では、次のような観点から住民による特産物づくりの支援が重要視されているそうである。①高齢者の生きがいづくり、②閉農対策、③地域の活性化。

## 6-2 特産物づくりを行っている住民に対するアンケート調査結果（ヒアリング調査の結果を補足）

- (1)回答者の属性は、60歳以上が全体の89%[有効回答数35]、女性が全体の65%を占めた[有効回答数34]。  
 (2)生産している特産物の品目は、次のとおりである。  
 ①野菜81%、②米53%、③花33%など[有効回答数36]。  
 (3)特産物の生産場所は、次のとおりである。①田畑でつくっている86%、②工場7%など[有効回答数24]。<sup>(※)</sup>  
 (4)特産物の販売場所は、次のとおりである。①大野青空野菜市場47%、②無人販売所42%、③大野屋22%、④京都市にある美山町のアンテナショップ6%など[有効回答数36]。  
 (5)特産物の購入者は、次のとおりである。①観光客以外の地元以外の人が多い44%、②地元の人が多い（違う地区の人）31%、③地元の人が多い（同じ地区の人）28%など[有効回答数32]。

表2：大野無人販売所のグループに所属している住民に対するヒアリング結果

・大野無人販売所に買いに来るお客さんは、地元の人よりも遠方からわざわざ買いに来てくれる人の方が多い。そういったお客さんから、野菜が無農薬栽培でおいしいと喜ばれている。

- (6)特産物づくりの楽しみは、表3のとおりである。このことから、特産物づくりが生活のためだけではなく、楽しみや生きがいにもつながっていることがわかった。

表3：「あなたにとって特産物づくりは、どのような楽しみや生きがいになりますか？」に対する回答(複数回答) ※回答数が多い項目より、一部抜粋

項目	回答数(%)
自分のつくったものをお客さんに買ってもらえること	24(6.9%)
ちょっとしたお金が入ること	21(6.0%)
一緒に活動している人たちが集まって話をしたりすることが楽しい	15(4.3%)
活動自体が楽しい	11(3.1%)
お客さんとのやり取りが楽しみである	11(3.1%)

- (7)特産物づくりをはじめたきっかけについては、次のような回答が得られた[記述式回答]。①知人に誘われて特産物づくりをしようと思った、②農地の荒廃を防ぐために特産物づくりをはじめた、など。

表4：岩江戸養鶏組合のグループに所属している住民に対するヒアリング結果

・大野屋ができたときに、地域を活性化させなければいけないと思い、特産物をつくって売ろうと思ったことが、特産物づくりを始めたきっかけである。

- (8)地域振興会への特産物づくりについての相談の方法は、次のとおりである。①他の用事（行政手続、買い物など）で地域振興会に行ったときに、気軽に相談したことがある25%、②地域振興会の人たちは親しみやすいので、気軽に相談している21%、③特産物づくりの活動をしているところに、地域振興会の人を話を聞きに来てくれたことがある17%など[有効回答数30]。  
 (9)地域振興会からの特産物づくりの協力は、次のとおりである。①商品をお客さんに提供してもらった50%、②特産物づくりのことを宣伝してもらった（新聞・町の広報など）31%、③人手が足りないとき、人手を派遣してもらった6%など[有効回答数16]。

表5：大野無人販売所のグループに所属している住民に対するヒアリング結果

・無人販売所の会員は高齢者ばかりということで、大野振興会がテナントを貸してくれて無人販売所の建物を建ててくれた。  
 ・大野振興会が何かとやってくれるので特産物をつくるやる気がでる。

表6：大野青空野菜市場のグループに所属している住民に対するヒアリング結果

・大野振興会のつくった大野ファームセンターでは、住民で手が余っている人に登録してもらい、農業を営んでいる高齢者世帯で依頼すると、草刈り、田植えなどの農作業のために人を派遣している。作業の賃金は、それぞれの作業によって金額が決まっている。今のところは、自分はこのサービスを必要としていないが、このような取り組みは心強いと感じている。

## 6-3 住民出資の商店の関係者に対するヒアリング調査結果

(有)大野屋[大野地区]・(有)タナセン[鶴ヶ岡地区]・(有)村おこしセンター知井の里[知井地区]・(有)ネットワーク平屋[平屋地区]の関係者に対して、ヒアリング調査を行った。住民が上記の法人を設立した理由は、法人であれば町役場が店舗を貸し出せることなどであった。本稿では、多くの地域課題に地域振興会と協力して取り組んでいる(有)タナセンについてのヒアリング結果を表7に記す。

表7：(有)タナセンについてのヒアリング結果

項目	内容
所在地・建物	鶴ヶ岡地区鶴ヶ岡集落・以前農協の支所だったところを町が買い取り無償でタナセンが借りている <sup>(※)</sup> 。鶴ヶ岡振興会と同じ建物である。
従業員(役員)数・年齢	従業員は5名で、役員は8名である。従業員の年齢は10代～60代、役員は40代～50代である。
タナセンの活動の概要(特産物づくりをしている住民との関わり)	・タナセンの商店では住民のつくった特産物をお客さんに売るスペースがある。タナセンが出来る前の農協の時から特産物は置かれていたが、タナセンが出来てより多くの特産物が置かれるようになった。 ・住民のつくった特産物があるということで、地区の住民がどこかへ出かけるときにお土産として買いに来たり、観光客が買いに来ることが多い。
タナセンの活動の概要(地域振興会との関わり)	・タナセンの建物の横でお風呂と休憩室を高齢者のために運営しているが、お風呂と休憩室は鶴ヶ岡振興会から町の補助を申請してもらって建ててもらったものである。 ・地域振興会と協力して祭りなどのイベントの時に高齢者を送り迎える活動を無料でやっている。 ・地域振興会と、そばの収穫祭などのイベントをおこなって都市の人との交流を図っている。

## 7. まとめ

本研究の結果、美山町では、地域振興会・特産物づくり・住民出資の商店の活動が、お互いに連携しながら地域づくりを推進していることがわかった。また、行政が地域に入っていくことで、より住民のニーズに合った地域づくりの支援をおこなっていることがわかってきた。

### <脚注>

- 千原仁、水野弘之：「老後も住み続けることができる地域づくりに関する研究～島根県松江市において住み続けることができる高齢者のケーススタディ～」日本建築学会学術講演梗概集F-1分冊 1999 P655 ほか
- 本研究では、「美山町で生産された産物」を「美山町の特産物」として扱っている。
- 本研究の対象地域である京都府美山町に関する研究はいくつかある<sup>(※4)～(※5)</sup>。その中で、本研究と関連の深い研究に宮田<sup>(※5)</sup>の研究がある。宮田は、元気老人の地域づくり活動(特産物づくりを含む)に注目して研究し、これらの活動が、高齢者の生きがいづくり・地域コミュニティづくり・地域の生活空間の保全などに役立っていることを指摘している。ただし、本研究のように地域振興会や住民による特産物づくり・住民出資による商店と地域づくりとの関係についてはふれていない。
- 三宅雅美：「中山間地域における地域資源の保全と活用に関する研究～美山町における都市・農村交流の現状と課題」京都府立大学住居学卒業研究、1996.2
- 宮田千恵：「元気をもたらすお年寄りの地域における活動と地域づくりとの関わり～京都府美山町におけるケーススタディ～」京都府立大学環境デザイン学卒業研究、2000.2
- 過疎化が進んできたため、自治会等の組織の役割を兼職しなくてはならなくなり、個人の負担が大きくなったので、役員の簡素化を狙って地域振興会をつくった。
- 霜浦森平：「地域組織の再編と地域密着型行政による地域資源管理システムの変化に関する考察～京都府美山町における「地域振興会」の取り組みを事例として」農業経営学講座ゼミレジュメ2001.12.3 ほか
- 住民によると、以前は美山町の住民のほとんどが兼業農家であったとのことである。しかし、近年では農業をやめるところも増えてきたそうである。
- タナセンは地元の住民が出資してきた有限会社である。鶴ヶ岡地区にあった農協の支所が広域合併により廃止された時に、農協の支所の建物の中にあつた商店もなくなることになった。住民は、鶴ヶ岡地区で生活用品を買う店がなくなってしまつと困るので、当時の自治会や公民関係者などで話し合つてタナセンを設立したというところである。